

I  
解  
說

# 京都大学における「学徒出陣」

西山 伸

## 1 「学徒出陣」という言葉

「学徒出陣」は、戦争と大学の関係を示す様々な事象のなかでも、よく知られたものである。この言葉の初出は、一九四三年八月二〇日に毎日新聞社から発行された合計一二六頁の小冊子「学徒出陣」であると言われている<sup>(1)</sup>。この冊子は、大本営海軍報道部の海軍中佐高瀬五郎の監修のもと、同じく海軍報道部の海軍主計中尉高戸頭隆の手によって書かれている。主な目次は次のとおりである。

- (1) 学窓より戦場へ
  - (2) この眼で観た三大海戦
  - (3) 日・米学生決戦の秋
  - (4) 今ぞ起て青年学徒
- (附) 海軍予備学生へ

執筆者の高戸は、一九四一年一二月に京都帝国大学経済学部を卒業、その後海軍に入っている。右の構成から見てもすぐ分かるように、この冊子は、大学から海軍、そして海戦に参加した執筆者自らの経験をまず語った後、アメリカの学生が早い段階から飛行機搭乗員をはじめ兵力として動員されており、日本の学徒もそれに負けずに軍に身を投じよと述べているのである。高戸は「今ぞ起て青年学徒」の章で、「今こそ青年学徒が剣を執つて起つべき出陣の秋が来た。アメリカの大学生さへ飛行機に乗つて、北はアリュウシヤンより南はソロモン海域に飛んで来るではないか。われらが奮起するとは、われらが起つて

飛行機に乗り、自らもつて敵米英を叩くことに外ならない」と述べている。

この冊子は、巻末に海軍予備学生規則と、志願者心得を載せている。つまり学徒の入隊を一般的に勧めているのではなく、この年に募集人員を大幅に増やした海軍予備学生（飛行科なら第一三期、兵科なら第三期）の志願を促すという明確な目的をもった刊行物というわけである。この頃はまだ徴集猶予停止以前であり、大学卒業後に陸軍の徴集を受ける可能性の高い学生たちに進路の一つとして勧められていることになる。

冊子の効果がどの程度あつたのか定かではないが、奥付には二度の発行で合計九万部印刷されたと記されており、広い範囲に行き渡つたのではないだろうか。実際、一九四三年の海軍予備学生には前年より大幅に採用者が増えている<sup>(2)</sup>ことから、ある程度の効果は持つたであろう。

一方、一般に「学徒出陣」という言葉が使われ出すのは、やはり一九四三年一〇月の在学徴集延期臨時特例公布前後のようである。例えば『朝日新聞』東京本社版で、学徒の入隊について「出陣」と表現している最初は、管見の限りでは一九四三年九月六日付の紙面で、海軍飛行科予備学生の採用が決まった早稲田大学生について「早大水泳部三君必勝の出陣」と見出しで記されている。「学徒出陣」だと、九月二三日付の紙面にある東京工業大学の卒業式について「兵学一如の決戦体制による『学徒出陣』の秋を飾って、東京工大の卒業式は〔中略〕行われた」とあるのが最初のものである。その後少しずつ使用例は増えていくが、「学徒出征」「学徒出撃」等、同様の意味で異なった用語も使われており、必ずしも「学徒出陣」が定着していったわけではない。それが一〇月二一日に首都圏の大学・高専七七校を対象に行われた文部省と学校報国団本部主催の神宮外苑競技場での式典が「出陣学徒壮行式」と称されてからは、「学徒出陣」「出陣学徒」といった言葉が普通に使われるようになったと思われる。もともとは、学徒の志願を促すため勇ましい言い回しが採用された用語が、徴集される学徒に対して専ら使われるようになったのである。

いずれにしろ、「学徒出陣」とは元來軍の側からの明確な目的意識を持った言葉であることは間違いない。その意味では、歴史用語として現在そのまま使用するのは適当でないかもしれないが、すでに広く定着した用語であることと、当時の状況を示す用語であるという理由から、本調査研究では、カギ括弧を付して用いることとした。<sup>3)</sup>

## 2 研究史

### (1) 全般

「学徒出陣」について触れられた書物は言うまでもなく数多い<sup>4)</sup>。だが、そのうちの大部分は、『きけわだつみのこえ』『雲ながるる果てに』のような遺稿集や、林尹夫『わがいのち月明に燃ゆ』のような個人の遺稿を編集したもの、軍隊の同期や学校の同窓単位でまとめられたり、個人でまとめた回想の類であり、「学徒出陣」を一つの歴史事象として客観的に分析したものはまだ少数である。そのなかで、森岡清美<sup>5)</sup>や大貫美恵子<sup>6)</sup>の著作は、特攻隊員を中心として学徒兵の遺稿を分析し、彼らの心性まで踏み込んで考察を行ったものである。また、「学徒出陣」の全容について解説を試みた著作としては、安田武『学徒出陣新版』三省堂、一九七七年、わだつみ会編『学徒出陣』岩波書店、一九九三年、蟻川寿恵『学徒出陣——戦争と青春——』(前掲)などが挙げられる。このうち、安田と蟻川は一九四三年一二月の出陣学徒数の推計を行っている。ところがその数は安田が一二、三万、蟻川は五万人近くとかなりの差がある。ともに『文部省第七十一年報』(一九四三年版)をもとに算出しているが、安田の算出方法はかなり粗く、残された資料である東京商科大学の臨時徴兵検査判定集計を利用して詳細に入隊者数を推計している蟻川の方がより実態に近いのではないかと思われる。ただ、いずれの著作でも一九四三年一二月の徴集者数にとどまっております、その後敗戦まで続く徴集者数については言及がない。また、在学中

の戦没者数については、蟻川が東京帝国大学と東京商科大学の戦没者数から徴集者の九・三%と推計し、約四、六〇〇人と割り出している。<sup>8)</sup>

### (2) 京都大学関係

戦後、京大は二度沿革史の編纂を行っている。「京都大学七十年史」<sup>9)</sup>では、「第二章 帝国大学時代」の「第四節 戦時下の大学」において「学徒出陣」について記述されている。そこでは、制度面の説明と出陣学徒壮行式の様子が略述されているほか、「臨時徴兵検査の結果、残留者は法学部約一九%、文学部約三〇%、経済学部約三〇%、したがって文科系学生の約八割が学業半ばにして入隊することとなった」(一二六頁、原文は横書き)とある。この数字の根拠は、『京都帝国大学新聞』一月五日付の記事であろう。「本書」Ⅲ「資料」の「2 京都帝国大学新聞」資料10参照。なお、以下Ⅲ—2—10のように表記する。

また、『京都大学百年史』<sup>10)</sup>総説編では同様に制度的枠組みや各種壮行行事の説明を行っているほか、朝鮮・台湾出身の学生についても独自の壮行式が行われたことが『京都帝国大学新聞』の資料により述べられている[Ⅲ—2—14・26]。しかし、残留学生数については「京都大学七十年史」と同じ資料にもとづいて記述されるに止まっている。また、その他に資料編二では、『京都帝国大学新聞』を中心に八点の関係資料を収録している。

なお、どちらにおいても戦没者数や、当時の学生たちの体験については全く触れられていない。

### (3) 他大学関係

京大に限らず、全国の大学で「学徒出陣」についての本格的調査はなかなか行われなかったが、最近、特に一九九〇年代に入り「学徒出陣五〇年」「戦後五〇年」を迎える頃からいくつかの大学で徴集者や戦没者の調査が行われ始めた。